

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2024年 7月 4日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・M1
氏名	田之畑穂花

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、愛知県犬山市 日本モンキーパーク
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
JMC動物園実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2024年6月14日 ~ 2024年6月16日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター 山本真也氏、日本モンキーセンターキュレーター 新宅勇太氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では、公益財団日本モンキーセンターにおいて、日本モンキーセンターの歴史や博物館としての動物園の存在意義について実践的に学習を行った。
・スケジュール 6/14 集合・日本モンキーセンター見学 6/15 観察実習・解剖見学・標本実習 6/16 飼育実習・動物園教育・来園者調査
【1日目】 初日は日本モンキーセンターの園内を見学した。モンキーセンターの展示の仕方は、動物の生活環境も来園者の目にどう映るかも考えられていて様々な工夫がなされていることが分かった。例えば、フクロテナガザルのエリアでは、テナガザルが森の中でどのような姿で暮らしているかを来園者に知ってもらうために、視界の開けたところに雲梯を設置し動きを見ってもらうような工夫をしている。その他にも、ケージの中で一緒に過ごす個体を選ぶときは、最初にお見合いをさせて上手くいくかどうかを確認するという工程を導入しており、動物の扱いは非常に慎重になされていることが分かった。モンキーセンターは比較的緑が多い展示がされ、来園者が動物の野生化での本来の生活や動きを知ることができる良い機会になりそうだなと思った。しかし、一方では動物がよく見えないといった声も来園者からあるようで、動物園側の何を見せたいかという意図と、来園者の何が見たいかという要望が合致しない場合もよくあるのだろうなと思った。
【2日目】 観察実習では、サルの音声コミュニケーションの頻度は生息地の地形によって差があるのではないかと、という仮説のもと、ワオキツネザル、アヌビスヒヒ、アビシニアンコロブス、フクロテナガザルの4種を観察し、比較した。仮説では、見通しのきく崖や草原で生活するアヌビスヒヒの音声コミュニケーションは少なく、熱帯雨林などの見通しの悪いところに生息する種の音声コミュニケーションが増えると予想した。しかし、結果はアヌビスヒヒの音声コミュニケーションが多く、樹上性のコロブスがほぼ鳴かないといった結果になった。さらに耳の形も観察した。アヌビスヒヒの耳は毛に覆われており、ほとんど観察できなかった。アヌビスヒヒの生息地は赤道付近の高温地帯であるにも関わらず、高密度で体毛が生えており、暑くないのかと不思議に思った。ただ、生息地は直射日光を浴びやすく、乾燥していることから、体毛の多さは紫外線や乾燥から守るために進化したのではないかと考察した。 標本実習では、実際にサルの骨を部位ごとに分類し、箱に詰めるという作業を行った。パーツを1つでも失くしてしまうと標本として成り立たなくなってしまうので、とても慎重に扱った。日本モンキーセンターでは死んでしまった個体はすべて標本として残しているそう。



アヌビスヒヒの耳（後ろ）



アヌビスヒヒの耳（横）



ボンネットモンキー♀の骨格標本

【3日目】

飼育実習では、リスザルのエリアを担当した。リスザルのケージの中に台や消防ホースを用いた遊具を手作業で作って取り付けた。台は木材をノコギリで切り、ドリルで穴をあけ、ネジで止めて作った。その際に飼育員の方が仰ったのは「リスザルが指や腕を挟まないように隙間はこれくらいにしよう」や「リスザルが怪我をしないようにネジは表面が平らになるようにとめてね」という言葉だった。その指示を受けて、実際に自分の頭で考えて、手作りで台を作るのは大変な作業で、飼育員の方は動物が安全に過ごせるように様々な工夫をしているのだということを感じた。また、消防ホースを取り付ける際は、リスザルの動きをよく観察して、どのようにしたらリスザルが遊具を使ってくれるかをよく考えて取り付ける必要があるということ飼育員の方から伺った。私は単に消防ホースを取り付けるだけだと思っていたので、そこまで考えて取り付けられていることに驚いた。私はリスザルがどうしたら楽しめるか、台から遊具へのアクセスしやすさなどを考えて、取り付けた。最後にリスザルが自分たちの取り付け台や遊具を使っているところを見ることができて、達成感を感じた。

来園者調査では、私はアヌビスヒヒのエリアを担当した。アヌビスヒヒのエリアは直射日光が当たる場所であるため、来園者がほとんど来なかった。数人訪れたが、エリアを1～2分かけて一周してすぐに他の場所へ行ってしまった。一組のカップルがアヌビスヒヒのエサやりをしに来たが、ヒヒたちはごはんを食べた後であったため、エサをほとんど食べなかった。エサやりをしていたカップルは「全然食べへん」や「あの子こっちは見てんのに動かへん」などという発言をしており、ヒヒの反応が期待とは少し違っていたようだった。このことから、この来園者が求めているものは動物の大きな動きや動物と触れ合うことな

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

のだろうと推測できた。来園者の会話や表情などを観察することで、どのような目的を持って動物園に来たのか、動物を見てどういう気持ちを抱いたのかなどが分かり、来園者調査は動物園の継続や展示の仕方を考える上でとても重要だと感じた。



リスザルの台を作る様子

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

実習中は、山本真也先生、新宅氏、赤見氏にご尽力いただき、充実した日々を過ごせた。重ねて深く感謝申し上げます。